海外レポート

韓国で注目され始めた衡平運動

朝鮮の被差別民衆「白丁」とその輝かしい衡平運動の存在、そして全国水平社との連帯の歴史。こうした点への関心・研究は、「国際化」の時代を迎える中で改めて重要となってきている。しかし、残念ながら日本のみならず韓国においても、そうした取組みが弱いのが実情である。

昨年、部落解放研究所より『朝鮮の被差別民衆』として翻訳出版した、「白丁」出身の金永大（キムヨンデ）著『実録　衡平』も、韓国で一九七八年に発刊されたが、ごく一部の人を除いて、問題を過去のこととして黙殺するか、「寝た子を起すな」的風潮の強い中、あまりかえり見られなかった。それどころか、脅迫の電話まで鳴るといった状況であった。

しかし、こうした状況を打ち破るかのように、農民詩人として知られている鄭棟柱（チョンドンヂュ）氏が昨年、長編小説『白丁』を刊行し、韓国社会で大きな反響を呼んでいる。

ここに①『朝鮮日報』（一九八八年一一月一六日付）が掲載したその書評を紹介すると共に、②当研究所で翻訳出版した『朝鮮の被差別民衆』と金永大さんの抱負が同新聞（一九八九年三月一四日付）に大きく報道されたので、あわせて紹介する。「白丁」や衡平運動、そして水平運動との関連等についての研究と理解、そして連帯がさらに前進することを望むものである。

なお、翻訳は、金静美さんに担当していただいた。

（編集部）

①『朝鮮日報』一九八八年一一月一六日

〝賤民の恨、改革意志に照明〟

詩人鄭棟柱氏、長編小説『白丁』第一部の三巻発行

晋州民乱など、疎外された階層の闘争史を描く

全五部二五巻構想

〝考証抜きんでた労作〟評価

「白丁」は、朝鮮の歴史上もっとも差別されてきた集団の一つである。本来、無位無官の平民を意味した「白丁」は、朝鮮王朝時代に入っていつのまにか、もっとも卑賤な敗北者集団を意味する用語として使われるようになった。支配階級のイデオロギーにおおい隠され見失われてしまった彼らの生は、はたしてどのような姿だったのか。

〝埋もれた歴史　再発掘〟

「農民詩人」としてよく知られている鄭棟柱氏（三九歳）が、最近長編小説『白丁』を刊行した。上・中・下の三巻に分かれたこの大河小説で、鄭氏は、『白丁』がどのような性格の集団であり、彼らが朝鮮の歴史上において占めている位置がどのようなものであったのかを、緻密な構成をもつ長い物語で解きあかしている。

「時代背景は一八六〇年代初、『晋州民乱』が起こった時期です。この最初の農民蜂起に賤民中の賤民であった白丁がどのような役割を果たしたのか、これが一巻の導入部です。」

この小説には、官職に就くことを拒否する良心的知識人（「両班」）と、反乱農民に財政的援助を与える富裕な賤民（「白丁」）が登場する。彼らを中心に、官の虐政に全身で抵抗する民衆の闘争が生き生きと描かれる。

家系が明らかになることを恐れ、取材難

「この本で、私は、集団論理、あるいは支配階級の横暴のもとで呻吟し、死んでいく人々の一つの姿を確認しようとしました。しかし、この確認が、単純に過ぎ去った時代の再照明に止まらず、今日を生きるすべての人々に、『開かれた世界』としての健康性と道徳性を贈ることができるようになれば、と思います」

小説『白丁』は、いったんこの三巻で完結する形式をとっている。だが、鄭氏の「白丁」の物語は、舞台を東学革命、日帝植民地下、解放と六・二五〔朝鮮戦争〕、産業化時代に移して限りなく続く。鄭氏は、『白丁』を第一部にし、今後、題名を変えて、全五部、総二五巻で締めくくる計画である。一九七九年、一〇・二六事件〔当時大統領であった朴正熙の暗殺〕で終わりを飾るまで、「白丁」は、日帝下の「衡平運動」で示したように、積極的現実改革勢力として一貫して歴史の前裏面に現われるのである。

「この小説を準備しているとき、もっともむつかしかったのは、白丁に関する資料を収集することでした。白丁の子孫であるという事実を隠して生きている人々を訪ねて取材するのは、それほど簡単なことではありませんでした。この過程で、日本に散在している資料にもかなり助けられました。」

進歩的抵抗勢力に変貌

鄭氏の本業は詩人である。慶尚南道泗川に辛うじて生活していくだけの農地を持ち、「土まみれのうた」「巡礼者」「論介」などの詩を発表、一九八四年に「今日の作家賞」を受賞したこともあり、力量のある中堅詩人としていっそうよく知られていた。

小説家としてのデビュー作になる『白丁』に対して文壇が払っている関心はふつうではない。文学評論家金思仁氏は、「衡平運動と白丁身分の根源についての誠実な歴史的考証と現場取材を土台にした大河的息吹き」、洪正善氏は、「もっとも差別されてきた集団である白丁階級の人々がどのようにして、一九世紀以後の歴史において、もっとも先進的進歩性を備えた集団として浮かび上がってくるようになったのかを証言する小説」と、『白丁』を評価する。

「白丁」を素材にした小説では、黄順元の『日月』があるが、正面から本格的に扱った作品は、事実上『白丁』がはじめて、と評者は言う。二五巻全体の骨組みをすでに定め、文芸誌への連載などをせず、直接単行本として出版する点も、作品の完成度を推測させる材料である。

（金享基記者）

②『朝鮮日報』一九八九年三月一四日

日帝下の白丁人権運動にはじめて照明

『朝鮮の被差別民衆』　日本で話題

一九二〇年代の衡平運動　追跡

三代にわたって「白丁」であった韓国人がまとめる

日帝下における白丁人権運動団体であった衡平社の活動の全容が、一人の「白丁」の後裔の執念の努力によって明らかにされ、日本語で出版された。

清州にある永光産業常務の金永大氏（五四歳）が最近日本の解放出版社から発行した『朝鮮の被差別民衆』がその本。

白丁は、わが国の歴史においてもっとも差別されてきた集団であったが、その起源や社会経済的条件などはほとんど知られていない。彼らの人権回復運動がひとつの団体を形成、日帝下の独立運動に大きく寄与したという事実を知る人は多くない。

〝賤民〟偏見は根深い

著者の金氏は、祖父の時以来三代にわたる「白丁」（金氏自身の表現）集団の後裔。彼の外祖父は、獣の皮で太鼓、はき物などを作る皮職人であり、妻もまた、「白丁集団」である。彼が現在勤務しているのは、清州で一番大きい屠畜会社。『朝鮮の被差別民衆』には、このような境遇の金氏が体験しなければならなかった恨と苦悩、いまだに残っている社会的偏見に対する抗議が切実に込められている。

「幼いころ、おじいさんが足が悪いといって、友だちからよくからかわれました。おじいさんは、『おまえが大きくなれば話そう』というだけで、自分がなぜ歩行が困難になったのかを話そうとしませんでした。おとなになって、おじいさんが衡平運動に参加、両班の召使いに袋叩きにされたためにそうなったことを知ってからは、先祖が歩んで

朝鮮日報　西紀1989年3月14日　火曜日

日帝下白丁人権운동 최초조명

「백정」3代 한국인이 펴내

「조선의 피차별 民衆」日서 화제

20년대 衡平운동 추적

日 백정동맹 출간요청…"증언꺼려 채록어려움"

"対地主투쟁서 조직적 독립운동 승화"

「実録 衡平」내기도

〈写真説明〉

上記の記事の日帝下における衡平運動の実相を追跡した単行本の著書『朝鮮の被差別民衆』を出版した金永大氏。「白丁」集団の後裔である彼の夢は、衡平研究所をつくることである。

（写真＝徐捧珠記者）

きた苦難の跡をかならず掘りおこそうと決心しました。」

一九二三年、晋州で点火

『朝鮮の被差別民衆』は、日本語で発行されたものであるが、韓国人によって書かれた初めての「白丁史」である。

この本で、金氏は、高麗時代末期の杜門洞七二人から始まる白丁階級の由来と歴史、日帝下における衡平社結成の社会的背景、その具体的な活動状況、衡平運動に対する社会的反発などをひとつひとつ明らかにしている。特に、衡平運動の展開についての彼の研究、資料収集は、韓国現代史の貴重な裏面を示している。

「白丁子弟の学校入学問題から、一九二三年、晋州で始まった衡平運動は、はじめは素朴な人権回復運動でした。しかし、両班地主の背後に、日本帝国主義というより大きな支配階級があると知った瞬間、自然に民族独立運動に飛躍することができたのです。」

成均館大学校政治外交学科出身の金氏が、白丁に対する「歴史的復権」作業に本格的に着手したのは一九七一年からである。軍を除隊になったあと、ソウルで精肉業を開業、小さくない金を得たが、ある日、果敢に「庖丁を投げうち」、他の事業をしながら、資料収集に立ちあがったもの。

「実録　衡平」を出す

しかし、資料の大半が失われていただけでなく、生存する衡平運動関係者がかたく身元を隠したり、証言を拒否したりし、作業ははじめから難関にぶつかった。最初に、決心して出したのが資料集的な性格の『実録　衡平』（一九七八年）。この本を出版したあと、金氏は、「辛い過去を暴く理由は何か」という激烈な批難、抗議を受けた。

『朝鮮の被差別民衆』は、すなわち、この『実録　衡平』を全面的に補完、体系化したものである。「この本が日本語で発刊されたのは、日本の部落（白丁）解放同盟創立二〇周年記念事業のひとつとして出版されたからです。」「韓国も、日本ほどひどくはないが、屠場、食肉業者に対して、目に見えない偏見がいぜんとして存在している」と指摘する金氏は、「強いて、自由・平等の近代理念を持ち出さなくても、『白丁』だといって差別する思考方式は時代錯誤ではないか」と語った。金氏の夢は、近代史関係の学者を中心に、衡平研究所を設けることである。

（金泰翼記者）